第二十三章　河越館の春　－　幼馴染

翌日、吉次一行は鎌倉を出発した。吉次の家人の他の同行者はもうすでにほとんどいなくなり、数名を残すだけになっている。これからは、鎌倉街道を通って武蔵国府まで行き、そこから東山道武蔵路を経由して、東山道の本道に入り奥州平泉に向かう。

東山道武蔵路を北上すれば、必然的に河越館の脇を通る事になる。

郷子は、河越館によるべきかどうか真剣に思い悩んだ。義経誅殺の命令を拒んだために領地の半分は没収され、父と兄は、館で蟄居を命じられている。義経の妻郷子が寄れば迷惑が掛かるのは必定だった。だが、何にもまして郷子は、家族に会いたかった。義姫を家族に見せたかった。その強い思いは理性では抑えられなかった。

（どうしても家族に会いたい）

しかも、いま奥州平泉に行っても、大江広元の計画通りとすれば義経はまだ到着していないだろう。

志乃に河越に残る事を薦めると、一緒に奥州平泉に行くと言う。貧しい武士にとって出戻りは食い扶持が増えて迷惑なのだ。しかし、そう言う一方で志乃もやはり年老いた両親には一目会っておきたいようだった。武蔵国府に着く前に、郷子は、志乃に先を急いでもらい、可奈に会って河越館の様子を聞いてもらうようにした。志乃は、数日後に戻ってきた。

「可奈に会えた？」

郷子は、顔を合わせると直ぐに聞いた。

「可奈さんは、郷姫が近くまで戻ってきていると聞いて興奮されていました。ぜひ、会いたいと。ただ、お館の様子がおかしいので、八重と相談して、取り敢えず八重の家の使っていない離れに落ち着いてもらおうという話になったのだそうです」

「可奈と八重に会いたいわ」

そう思うと、矢も盾もたまらなかった。

「二日後の戌の刻に、新日吉山王権現の前で待ち合わせることにしました」

この新日吉山王権現（日枝神社）は、父河越重頼が京都東山の新日吉山王社から分祀してこの地に創建し、河越氏の総鎮守として崇敬している神社だ。

郷子は、吉次のところに話に行った。

「この先で、実家の河越館を脇を通りますので、寄って行きたいと思います」

「頼朝殿は、重頼殿に鎌倉への出入りを禁じたそうですよ。なにしろ、あの人は、配下のものをもともと信用していない。さらに、梶原景時が、謀反の恐れありと讒言しているらしい。なにしろ、景時は、義経殿に恨みを持っていますからね。坊主憎けりゃ袈裟まで憎いのたぐいでしょう。だから、あまりお奨めはできないが、しかし、貴女の赤子を見せたいという気持ちも判ります。なにしろ、重頼殿は、孫の誕生を人一倍喜んでいたということですから。しかし、河越館に寄るに

しても噂が漏れる事は絶対に避けなければなりませんよ」
「友達が隠れ家を手配してくれています」
「そうですか。それでは貴女の気が済むようにしたら良いでしょう。われわれは、先に行きますが、東山道の駅々で聞いてもらえば所在が判るようにしておきます。もし、貴女の河越での滞在が長期になったら、その後いつでも平泉にあるわたしの館を尋ねてきてください」
「いつもながらの心配り有難うございます」
「それでは、お別れしますが噂が漏れないようにくれぐれも注意するのですよ」
　二日後、日が暮れると、郷子はややを抱きながら、志乃と新日吉山王権現の鎮守の森に急いだ。郷子にとっては、かつて毎朝の日課として三日月に乗ってきたところだから方向は熟知している。もちろん志乃も初詣などにきて良く知っている。
郷子と志乃が神社の境内に入ると、可奈と八重は既に待っていて、二人を見ると駆け寄ってきた。可奈が挨拶もそこそこに言う。
「京姫！よくここまで帰ってこれたわね」
「親切に助けてくれた人がいたの。あなた達にもお世話になります」
「ここでは、貴女の事を京姫と呼んで、毎日あなたの噂話でたいへんだったのよ。わたしたちを頼ってくれて嬉しいわ。でも、河越館には、頼朝の見張りがいるから用心しなくては」
「頼朝の見張り？」
「お館さまが、蟄居を命じられて、それを見張るために鎌倉から派遣された侍が三十人ほど河越館にいるのよ」
「河越の武士達はどうしたの？」
「河越の武士達は、畠山重忠殿の預かりになっていまは秩父のほうにいるの」
「それでは、さっそく行きましょうか」
　八重がうながす。八重の家は、この神社から入間川によった河越館から、それほど離れていないところにある。
　四人が入間川の傍まで来ると、河原で数名の侍が酒を飲んでいるが見えた。この辺りには川から田んぼへの水の取り入れ口となっている堰があり、魚が良く釣れる。かれらは釣りを楽しんだ後に酒宴に移ったらしい。
　四人が草むらに隠れながら移動していると、侍の一人が突然立ち上がって、彼女らのいるほうへ近づいてきた。四人が草むらに身を伏せると、その侍は近くまで来て、四人の目の前で袴を下までずり降ろすと小水を始めた。可奈は、丸い身体をさらに丸めて必死になって笑いを堪えている。郷子は、赤子が泣き出さないかそれが心配だった。長い小水が終わり、侍がまた河原に戻ると、四人は、かれらに気付かれないように、静かに移動を始め八重の家の門をくぐった。
　八重の家は、この辺りに大規模な土地を所有する豪農で、母屋の他に、いくつかの離れがあり、その一つが今空いているという。
　四人が離れに入ると簡単な食事が用意されていた。

「今日は疲れているでしょうから、ここでゆっくりしてね。それから、服を用意しといたからそれを着てね」
　部屋の隅には、農婦の着る粗末な麻の服が置かれていた。
「ありがとう」
　農婦に化けなさいというのだ。郷子は、かれらの配慮に感謝した。
「また明日はなしましょう」
　そう言うと可奈と八重は二人を残して帰って行った。
　その夜から、郷子は高熱をだして寝込んでしまった。どうやらずっと張り詰めていた神経がほっとして気が緩んでしまったらしい。八重が毎日食事を運んできてくれる。八重は、もう所帯を持ってやはりこの屋敷の離れの一つに住んでいるから、亭主が毎朝畑に出た後は、かなり自由に振舞えるのだ。可奈も毎日見舞いに来てくれる。
　可奈も八重も、郷子が京に着いた初日にした義経への武勇伝は噂で知っていた。
「噂によると婿殿に木刀で討ちかかって、投げられて、挙句の果てに無礼者と怒鳴ったっていうじゃない。もうみんなで腹をかかえて笑ってしまったわ。京姫は昔からそそっかしところがあるから、やりそうだわって」
「あいつが、最初にわたしを起こして名乗ればそんなことにはならなかったのよ。それなのに疲れて寝ているわたしを棒でつついたりするからいけないのよ」
「よく婚約破棄されなかったわね」
「わたしも心配したけど、なんだか面白かったみたい」
「ねえ、義経さまってどんなひとなの。鬼神のように恐いひとじゃないの」
「とんでもない。まるで天真爛漫な子供みたいなひとよ」
「まさか。うそみたい」
　昔なじみが三人集まるとこんな調子で話がいつまでも尽きないが、郷子の熱が下がらないので、名残惜しげに早めに帰っていく。
　志乃が農婦姿で外出していたが、帰ってくると、新日吉山王権現に郷子の病気の快復を祈願し、ついでにお田植え祭りへの参加を申し込んできたのだと話した。
　お田植え祭りには、農民の総意で今までどおり重頼が招待され、河越氏一族も全員が参加することになっている。
　志乃の祈願が効いたのか、可奈と八重とのたわいない話が効いたのか郷子は熱が下がって元の通りすっかり元気になった。
　お田植え祭りの前日、送別会に参加してくれた幼馴染がぞくぞくと離れに集まってきた。みんなは、都から聞こえてくる義経と京姫の噂話やいまは頼朝に追われている悲劇の主人公となった本人に会えて単純に興奮して、口々に「頑張ってね」と声をかける。そして、郷子が抱(だ)いているややを覗き込むと「これが、あの義経さまの姫なのね」と感激した声をだす。
　可奈が「京姫がここにいる事は、夫や親兄弟でも絶対に話してはだめよ」と念を押す。

それから、郷子と義姫をお館さま一族と会わせるためのいろいろな段取りが、踊りに参加するもの、楽曲を担当するもの、早乙女として田植えを実演するもの、儀式には参加せずに京姫を守るものの間でそれぞれ打ち合わされた。

お田植え祭りの当日、郷子はごく普通の麻の農婦の衣裳を着て、ややを背中に負ぶった。志乃は、田植えの実演に参加するため、紺のかすりを着て、真っ赤な手っ甲、脚絆、たすきをつけ、姉さん被りの頭に田笠をかぶった早乙女衣裳である。

お田植え祭りに参加する人は、みんな新日吉山王権現に集まって、まず神主からお祓(はら)いをうけた。その後神主により穀物の豊かな実りが祈願され、田植女たちに早苗が授与されると一同打ち揃って御田(みた)に歩いていった。御田には、すでに入間川から取り入れられた水が満たされている。御田の前には仮設の舞台が作られていて、その横には、紅白の幕が張られ、その前の床几(しょうぎ)にはお館さま一同が座っている。そして、その周りを、頼朝から派遣された見張り役の武士が十人ほどで取り囲んでいた。

御田をはさんだ向かい側には、村人が総出で祭りの行事に参加しているが、郷子も農婦の姿をしてその中に混ざっていた。郷子が赤子を抱いているとどういう訳か、郷子の周りには、同じように乳飲み子を抱いた若い農婦が七～八人いて郷子を取り囲むようにしている。太鼓や笛などの楽器がなり始まると、歌い女によって田植え歌が唄われ、舞台の上では神楽女による田舞が披露される。御田では、白装束に田笠を被った二人の男が、牛を使って田を耕す代掻(だいか)きの儀式を行っていた。

郷子は、御田をはさんだ向かい側から、父重頼と四人の兄妹を見つめていた。郷子は、この先、可奈や八重や幼馴染たちがどのような仕掛けを準備しているのか聞いていなかった。紅白の幕の前で、三十人ほどの早乙女衣裳に身を固めた田植女がお館さま一同に挨拶を行っている。その中に志乃がいるはずだ。志乃の顔は、父も兄妹も全員が知っている。 郷子が、だれか志乃に気付いて欲しいと祈るような気持ちで願ったが、同じような衣裳をして田笠を被った田植女の一人ひとりにだれも特に注意を払っていないようだ。田植女が、挨拶を終えて引き上げようとしたその時に、誰かが前の女にぶつかった。ぶつかられた女は、前に転ぶとその拍子に田笠と姉さんかぶりを取り落とした。

郷子が見ていると、兄の小太郎が隣の父の袖を引いた。父も気付いたようだ。田笠を落とした女は、その笠を郷子のいる方角にゆっくりと向けるとそのまま何事もなかったかのように田笠を被りなおす。田植女たちは、揃って歩き出すと、もう代掻きが終わった田に入って、一列に並ぶと田植え歌にあわせて早苗を植え始めた。

郷子が父と兄妹を見ていると、彼らもこちらを見ていた。しかし、遠くからでは、誰が郷子か確認できないようだ。郷子は、義姫を上に掲げようと思ったが、怪しまれるのではないかという気がして出来なかった。

しばらくすると、父と兄妹が床几から立ち上がった。それから、みんなで田植えを近くから眺めるふりをしながら御田の周りを回って郷子の方に揃って歩いて

くる。同じような農婦姿に乳飲み子をかかえた若い女たちの前まで来ると、父は順番に乳飲み子を腕に抱いて、何かを話しかけた。郷子は、三番目だ。

初めは、なんの興味も見せていなかった見張り役の武士の頭が何を感じたのか部下に命じると一斉に父や兄妹の一行に足早に向かってきた。すると、突然御田の田植女から悲鳴が上がった。見張り役の武士が驚いて立ち止まると、二人の田植女が泥にまみれて取っ組み合いの喧嘩をしている。二人の喧嘩が激しくなると、一方の田植女を応援していたほうが、他方の田植女を応援しているほうに泥を丸めた玉を投げつけた。双方二手に分かれて、泥玉の投げあいになった。御田の中は騒然としているが、田植え歌と舞台の上の田舞は、通常通りに行われている。見張り役の武士が、田植女同士の喧嘩を収めようと御田に近づくと、いままで喧嘩していた田植女が今度は、それらの武士を目掛けて泥玉を投げつけ始めた。武士があわてて逃げると、田植女たちは、追いかけて泥玉を投げつける。逃げ回る武士とそれに泥玉を投げつけようと追い回す田植女の間でまるで子供の遊びのような追いかけごっこが始まった。

重頼は、郷子から赤子を受け取ると目を細めた。

「こんな可愛い姫はいままで見たことがない。名前はなんという」

「義姫でございます」

「そうか。良い名じゃ」

重頼が郷子をじっと見つめた。郷子は、父からこんな優しい目で見られたのは生まれて初めてのような気がした。

「ご迷惑をおかけいたします」

「お前のせいではない。孫をたのむ」

重頼は、そう言うとさりげなく隣の若い女のややを腕に抱いた。

小太郎重房、重時、重員、綾姫、重方が次々と郷子の前を通ってゆく。一人ずつ目を合わせながら、これが今生の別れかもしれないと思うと涙が出て止まらない。綾姫は、目を真っ赤にさせて泣いている。

父と兄妹との対面が終わると、郷子はすぐにその場を離れて群衆の中に紛れ込み、そのまま離れに帰ってきた。

郷子が、ややを寝かしつけていると志乃が泥だらけになって帰ってきた。

「お田植え祭りが、こんなに楽しいものだとは思ってもみませんでしたわ。それに、母とも会えたのですよ。田植女姿で泥だらけになっていたので、あっけにとられていましたが、それがおかしくて・・ただ父は、畠山重忠のところに行っていて会えませんでした」

翌朝はやく、可奈と八重が離れにやってきた。

「昨夜は、みんなで祝杯をあげてすごく盛り上がったのよ。大成功だって。泥玉を持って、あいつらを追いかけると、いつもは威張っているくせに必死になって逃げ回るのだから、おかしくて、おかしくて。その後、あいつらが『なんでこんなことをするのだ』と文句を言うから、『これがこの辺りのお田植え祭りの風習です』と言

ってやったら、『それじゃしょうがない』と憮然としているの。『あいつら馬鹿じゃないの』とみんなで腹を抱えて笑ったわ。でも、やっぱりなにかおかしいと疑っている様子なので、すぐに出立したほうが良いと思うの」
「ありがとう。おかげさまで、父や兄妹に会うことが出来たし、義姫を見せる事ができたわ。みんなあなたたちのおかげよ」
　郷子は、二人の手を握り締めた。
「なにいってるの。みんな幼馴染じゃない。それに京姫は、わたしたちの中では唯一の有名人。応援したくなるのはあたりまえでしょう」
「なんのお礼もできないわ」
「そんなこといいのよ。さあ支度して」
　八重が、二人に衣裳を手渡した。粗末な麻の小袖に細帯を締め、そのうえに袖のないふさふさの狐の毛皮をはおる。足には脚絆を巻いて、わらじを履いた傀儡女（くぐつめ）の衣裳である。郷子は、さらに背中に義姫を入れた笈（おい）を担いだ。
「お田植え祭りであやつり人形劇を見せていた傀儡女から借りたのよ。今日ここを出て上野国に向かうというから、そのなかに紛れ込んだらいいと思ったの」
　傀儡は、狩猟しながら諸国を旅し、行く先々の村でなにかお祭りがあると芸能もみせる流浪の旅芸人の集団である。あやつり人形劇を得意とするが、その他の諸々の多彩な芸も見せて生業としている。
「わたしたち傀儡女に見えるかしら」
　志乃が心配するが、八重が言う。
「大丈夫。たっぷりとお米を渡しておいたから、きっと助けてくれるわ」
　可奈と八重は、郷子と志乃を二十名ほどの傀儡の一団が野宿していたところまで案内すると、「見つかったら大変だから」と言って、別れの挨拶もそこそこに帰っていった。
　郷子は、去っていく二人を見送りながら、心の中で手を合わせた。
（故郷の友達ほどありがたいものはないわ。ここに来てよかった）
　すでに準備を終えていた傀儡の一団は、郷子と志乃が加わると頭目の命令ですぐに出発した。男が七名、女が十名いて、子供も四人ほどいる。荷物を積んだ牛車と二頭の馬も連れている。ここでは頭目の命令が絶対でみんなその指示通りに動くようだ。
　河越の村はずれに来ると、東山道武蔵路に入る直前の仮設小屋に武士が数名いて、村への出入りを見張っていた。彼らは、傀儡の一団が村を出て行くのを黙ってみていたが、突然武士の一人が叫んだ。
「ちょっと待て」
　その武士は、傀儡の一団に歩いてくると、志乃を指差して言った。
「この女は、昨日たしか田植女の中にいたぞ。俺に泥玉をぶつけたから良く覚えている」
　頭目が、おだやかに答えた。
「いえ、この女は傀儡女に間違いございません」

「たしかに、着ている物はそうだが、傀儡女にしては色が白すぎるし、見かけも違う。もし、傀儡女というなら、芸を見せてみろ」
「この女は、耳が聞こえず、口もきけない哀れな女でございます。お許しを」
「いや、芸の出来ない傀儡女はごく潰しとして捨てられると聞いている。なにか芸が出来るはずだ」
　志乃は、そばに立っていた傀儡の男から持っていた独特の弓と矢を受け取ると、弓に矢をつがえて、無造作に空中にはなった。見ていたものは、あっと驚いた。矢は、飛んでいたすずめの羽に刺さり、すずめと共に下に落ちてきたのだ。志乃が、すずめを拾い上げて矢をすずめの羽からぬくと、すずめはまた飛び去っていった。
「疑いが晴れましので、失礼いたします」
　頭目がそう言って集団に合図すると、一行はまた動き出した。さきほどの武士は、もう何も言わなかった。

第二十三章　　了